

人間的であることの闘い — 神近市子 — インタビュー



神近

あれはね…宮嶋資夫だったかしら、「坑夫」っていう本を書いたのは。あの人の奥さんが、私の友達でしたの。それで新聞記者（東京日日）になっ
てから、あの方も『萬朝報』かどこかに居らした
んで、その縁から往き来があって、ほらむこうは
記者っていうと利用価値があるじゃない、ちょっ
とあいうことを書けとかね、ここで会合するぞ
って。そういうことで私の利用価値を認めたんじ
ゃないですか。宮嶋の奥さんの名前は…麗子でし
たよ。
神近さんが社会に目を向けられるようになったの
は、いつ頃ですか。

神近

今日は『青踏』等の婦人運動に関わられる一方、明治末から大正に至るアナーキズム運動を直に見て来られた神近さんに、文献では語り切れない、あるいは食み出した部分としてのアナーキストの在りようを素描的にでも語っていただきたいと思っています。
古いことでねえ。あなたがたが「あの時はどうだった」ということを出せば云えるかも知れないけど…。
それでは、神近さんがアナーキズムに入っていたか
れた、というかその出逢いということでお話しを
始めていただけますか。

神近

耶蘇学校でね、同志社出の物理の先生がいらしたの。耶蘇学校ではね、物理となると非常に困るんですよ（笑い）私どもは人間は神が創ったなんて話ばかり聞いているから物理の先生が面白くて授業の時には他の組からもワーッと来る。それが学校の気に入らなかったのか先生をくびにするんです。それが不当だってストライキする訳です（笑い）で、いろいろあって東京に出て竹久夢二の所に行くんですね。

神近

キリスト教から無政府主義というケースは多いですね。渡辺政太郎なんかもそうです。やっぱりそういう内的必然性が当時にはあったのですか。そうですね。先刻云ったように、みんな貧乏な時に、小石川かどこかに家をね。それで私が麗子さんに誘われて行ったのが最初で、アナーキズムを聴く訳ですよ。新鮮な感激はありましたね。キリスト教だって人を救う、あるいは困っている者という考え方、人道主義的な意味では手段こそ違えまあ同じでしょう。ですから入りよかったです。そういうものはよく聞いていたから。そうです、私もきつとその一人じゃないですか。初めキリスト教の人道主義についても心に酔い、そして社会主義の

神近

無政府主義なりに入るのですから。大逆事件があり運動が抑えられていく、〈冬の時代〉ですね。そうすると当時アナーキズムに入っていくというのは相当の覚悟がいったのではないですか。

それは大きなショックでしたね。何にも知らないから、いきなり殺されたというのはショックでしたねえ、若い者には。その時はまだじっとしてたような社会でしょ、そこに起こったんだから。

神近

ロシア革命が起きて、その影響からアナボル論争が出てきますね。神近さんはどのように捉えておられた訳ですか。前に吉田一のことを書いておられますけれど。ともかくロシア革命っていうものはかなりのショックっていうか影響でしたよ。「へえ、ロシアがねえ」というような。でも、その時分社会主義とかね、無政府主義とかってね、分けてするようになるのはその後だから。初めは社会主義も無政府もなにかね、党派は違うようだけど人間的なね。堺利彦とそれから若手がアナーキストになるんですからね。大学辺りでは研究があったかもしれない

神近

いけれど大学の人達はね民間にはあまり関係ないでしょ、先生方は。あの中でやってらっしゃるから。で、口や手でやるのはアナーキストなの（笑い）現在の左翼セクシヨナリズムとは随分違いますね。原点として人間的であることと云うか。もともと大学の教授が何も行動しないというのは今でも…

神近

荒畑寒村さんとはお知り合いだった訳ですね。ええ、一諸でしたよ。まだ分裂する前でしょ、ごく初期の頃に宮嶋さんに連れられて荒畑さんの所へ行ったことがあります。奥さんとも二、三度は、奥さんと別れる寸前ぐらいにね。でも、荒畑さんはそれからすぐ他の人と一諸になって出ちゃったでしょう。それで奥様方とは、だって話すにかないでしょう。

神近

それが初めてでしょうね。あの、どこか桜田門辺りに堺さんの事務所があったでしょ、あそこには二、三度出入りしたことがありますよ。そこで結局宮嶋を知って、ということになる。吉田の一人は、ちょっとぐらいあの、短かったんじゃないですか、あの団体にいたのは。辻潤なんかは覚えてられますか。

神近

神近さんのお宅にはいろいろな方が出入りしていたらしいですね。

光子さん（長女）

辻さんはねえ、きものに荒縄を巻いたりしててちょっとねえ。おっかない人だったみたいですね。

神近

やっぱり覚えていませんねえ。その時の宮嶋、荒畑寒村、それから…宮嶋さんとね、二階に行った時には随分集まりましたよ。二階が六畳に四畳ぐ

確か「魚の衷しみ」……。それからエロシエンコが来なくなりましてねえ、どうしたのかって、そしてみんなね、金のないアナキスト達が、みんなエロシエンコに集まってワイワイ云って書かせて（笑い）子供の雑誌にみんな売り込みで。だからうちに来る暇がなかった。その後ね、この人（光子さん）が生まれたのを聞いて見舞いに来たんですよ。そしたらね、二日ぐらいですよ、あの追放が出たのは。

そういった付き合いがあつて、やはりアナキズムという大杉栄が出てきますよね。よろしければ、大杉栄の印象というか人となりを、一言でも結構ですがお話し下さいませんか。

神近

そうですね：あれはね、向こうからね、強制的に、あの来たんですよ。私が記者してる時代でした。あの人はずうっと刑事がついて歩いてたでしょ、で今日はやうと刑事をね、まいてきたって云ってね……。そうねえ：それは私に批評させるのは：ちよっと無理でしょう。小柄なね、そうですねえ、やはり仲間とは相当隔たったようなところがありました。知識人だから。ええインテリ、その点があ、かなり離れていましたよ、他のアナキス

ト達とは。例えば宮嶋さんなんてね、あれは作家ではあつたけれども知識人ではなかったからねえ。光子さん 抜群に頭が良かったってことでしょう。普通のアナキストっていうのは吉田一さんでも文盲だったから。大杉がばあつとやっちゃうと、もうみんなわあてね、なっちゃうといった——

すると、理論的指導者というよりは、むしろカリスマ的、あるいは知識カリスマ的のでもいうか、そういうことですね。

光子さん

そういうところにひかれたんでしょねえ。他のことはねえ、あれだったらいいけれど。

神近

そうですね。私は大体ね、やはり非常に知識が旧知的だったから。だから歴史はよく知っていたけれど、その点では社会主義のことなんかあんまり知らなかったから。

神近さんにとって大杉栄は現在から未来を見る眼、歴史を透視する眼を開いた存在であつたと、そういうことですか。それでは、この辺で。

（二九七四・七）

草 蘆 晚 春

尾 崎 士 郎

私の青年期に、もっともつよく影響したものは大杉栄とストリンドベルヒである。この両者に何の関係もない。唯、私の生活の中で、この両者の思想を決定づける一つの角度だけが結びついているだけである。大杉はアナキストであつたが、彼のうしろには概念でめつけることのできないような人間内容が黒雲のような影を描いていた。私は今まで、これほど勇敢で、図太く、意慾と感情の流れるままに生きとほした男を見たことはない。彼は何時、誰とでも勝負をしようとしていた。彼はいつでも第一流であり、逆説によっておのれの存在を安定的なものにしようとしたことはなかった。それだけに、絶えず危険に身をさらして生きてきたのであろう。彼がアナキストであつたのは、推理による結論ではなく、何となく高邁で荘嚴なもの、もっとも純粋な形式への憧れであつたと思われる。

むしろ彼こそ生粋の英雄主義者であり、ロマンチストであつた。クロボトキンの相互扶助論や「青年に慫う」によって示された一種の理想主義が、彼の生活の中においては常に飛躍と闘争の原動力を成していた。生死の境界に立つて生きることが彼にとっては唯一の喜びであり、同時に、そのような危険に身をさらしていることが、彼の生涯を決定する宿命でもあつた。彼が葉山の日蔭茶屋で、昔の恩人であるI・K女史から斬りつけられた態度も立派であつたし、N・I女史と恋愛に陥ちていった心理的経過のいさぎよさにいたつては眼も醒むるばかりであつた。彼に匹敵すべきものは、ハイネをして唯一の魅力の象徴と言はしめたフェルディナンド・ラサルくらいのものであろう。日本人の中からこういう男の出たことがすでに不可思議であり、これを不可思議だと考えることによって彼の存在は未知の世界へのつながりを一層ふかくするであろう。無政府主義は政治行動でもなければ経済運動でもない。議会も否定するし、組合も否定する。彼は群衆の意慾がおのずから一つの方向を決定し、自然な動きを透して人間の意慾が形式化してゆくことは認めるけれども、権力をうしろ楯にしなければ行使することのできないような指導理論の存在を否定する。そこに群衆は群衆のままで存在し、党派によって制限をうけるということはない。

その頃から、文学理論の中で、リアリズムのロマンチズムとが

確然たる対立を示していたけれども、結局そういう区別は作品によって示される対立ではなくて人間内容がおのづからにして決定ずけるところのものである。

大杉は文学者ではなかったけれども、文学が暗示する人間内容の第一義的なものを正確につかんでいたと言えるであろう。彼の一生は汜濫する川のごとくにして終った。もし甘粕大尉の虐殺事件がなかったとしても、あのような烈しい感情の流れはどこかで必ず停止しなければならぬ運命であつたと思われる。人間性への影響は一定の順序を保って現われてくるものではない。表面にうかんでいるものは時間的な条件や地理的条件によって支配されるだけのもので、一見して、そういう反射的な機能には合理的なものが予想されるとしても、しかし、これが欺瞞であり詐略であることはおそらく誰れだつて理解するであろう。ストリンドベルヒはそのような情熱を人間の完成によって示した唯一の作家である。彼は文学の中に貧乏ゆるぎもしないような形をつくりあげた。この生一本な作者は時代との組打ちによって半生をすり減らしてしまつたけれども、しかし彼の青春はそれがために彼の文学の中に一つの世界を築きあげること成功したのである。文学におけるヒロイズムは現実の生活に影響することに目的を持つものではない。例えばヒットラーの没落によって、ニイチエが否定されるというようなことはまったく見当ちが

いの話であろう。

○ 「人は正しく墮ちる道を墮ちることが必要なのだ。そして人のごとくに日本もまた墮ちることが必要であろう」(坂口安吾「墮落論」) 私は墮落と没落とを特に文学的認識の上で区別して考えようとは思っていないが、個人と民族とを対比して、これに一つの現象形態をあてはめてみると、個人の墮落は自意識に基く行動であり、民族の没落は時間に限界を失つた運命的作用であると言ひ得る。終戦後の敗北感の上にあらわれた変化は時間的な速度の中でいろいろ起伏をつくりあげているが、しかし、令嬢が売笑婦になったり、貴族が闇屋になつたりするというような現象は、必ずしも底の底まで陥ちてゆく方向を暗示するものではなく、こんどは逆に売笑婦が令夫人になり、闇屋が新興財閥になつたり、代議士になつたりしてのしあがつてくるという反対現象を予意させるものである。

要するに個人の墮落には限界があり、動機が敗戦という現実を反映していたとしても、現象の変化だけを追窮すれば浮沈のマンネリズムを繰返えすことだけに終るであろう。それ故、坂口君の「墮落論」は墮落という觀念の上に当然あたらしい発展を予想するべきものであり、文学上の課題としては民族の運命から解放された個人の行動にあたらしい動きを示すものとならねばならぬ。民族の没落は、

戦争という突発的な事件の作用をはなれて、それ自体歴史の必然であり(むしろ戦争はその中に含まるべきものである)むしろ、今日の敗北感を乗り越えることによって一つの「精神」を完成する。没落は莊嚴であり雄大である。その方向は科学や理智によって判断することのできないような不可思議な動きの中に見出される。

個人を民族の運命から解放するという意味は、個人が民族を否定することではなくて、没落を極めつくそうとする意慾が個人の中に成長することを意味する。もし、このような時代に文学が没落の莊嚴さを表現することが出来ないとしたら、一体、ほかにどのような仕事があるのであろうか。民族の没落は死滅した人間の中からあたらしい魂をよびおこすことである。戦争に直面した日本人はいずれも異常な体験をもち、その異常さに足踏みをし戸惑ひしている。これを民族の悲劇に還元し、悲劇の中に安住しようとする努力ほど無意味なものはない。

○

文学者の生活は、彼が死とすれすれの境地に立つときにおいて一つのクライマックスを示すものである。しかし、死とすれすれに生きているということは死そのものではない。死そのものよりも、むしろ、すれすれに生きているという事実の方に重点があるのである。

太平洋戦争が勃発したとき多くの文学者が軍命によって徴用され、

つぎつぎと戦場に送りだされていった。このことは彼等が、仮説された国民的使命(もしくは運命)に殉じたというだけのこと、文学者としての立場において戦争の必然を感じ得たわけではない。時代の嵐はすさまじく、個人の力によって防ぎ得るものはどこにもなかった。しかし、彼等が人生の真実に徹しようという意志によって動いていたとしたら、小さな生活態度の中にもおのずから一つの変化が生じていたであろう。これは彼等が戦場において、いかに戦争を否定するために苦しんだかということでもなければ、いかに勇敢に戦ったかということでもない。卒直に言えば彼等(もちろん私をひっくるめて)には否定もなければ肯定もなかった。それほど政治の圧力がつよく、抵抗しがたいものであつたということも言えるであろうが、このような殉国の精神が高くそびえ立つたときに作家のロマチック・スピリットは形を失い、影を没して、唯、適当に生きるという処世的技術だけが残された。幾つかの従軍記が出版され、多くの作家たちが死地を潜って戦場を彷徨した姿が明かにされたが、彼等の感情は常に規定された仮説の上に組み立てられ、人間の肉体をはなれた言葉だけが、士気を鼓舞したり、民族の理想を激成したりすることに、ともかくも一つの役割を果たしたということが事実であるとしても、作家の誇に任ずべき行動はどこにもなかった。彼等が絶対批判の上に立つて戦争を否定しなかったということが問題な

のではない。当時の環境と時代的な雰囲気回想すれば、そのよう
な勇氣を作家だけに求めることは酷であろう。終戦後の今日、一応
の常識をふりかざして、誰が戦争に協力したかということを追窮し
たり、自分だけがその雰囲気の外に敢然として生きていたというよ
うなことを告白のできる心境が、いかに低俗なものであるかという
ことはすでに論議を絶している。観念が先行することによって文学
は死滅する。戦争が文学に関与した部分は唯、個人の死生観につ
いて一つの暗示をあたえたというだけのことである。とはいえ、文学
の枠はすでに今の時代的感情の中から完全に剥ぎ捨てられたと見る
べきであろう。今日において、自殺する心理は生きるという現実の
中に溶解している。それにもかかわらず、死生観が人間から遊離し
て、言葉の遊戯に転化しようとしつつあるところに大きな危険が――
戦争に駆りたてられた文学者の優柔不断よりも、はるかに大きな
危険が今日の時代感情の中に胎生しつつあることを痛感しないでは
いられない。

ストリンドベルヒが、「青春」の中で人気の消長について、堪え
られない気もちを、論じている一節がある。彼はボルテールが、彼
の軽蔑する男の、時運にめぐりあつて意気揚々とさばつてゆく姿
を正視できなかったということを書いているが、これはその男に對

する羨望の意味ではなく、人気そのものに對する魅力であり未練で
ある。一種の大臣病患者が政治家の中に多いのは、経綸を行いた
とか、政策を遂行したいとかいう抱負の然らしむることよりも、む
しろ、あの、もやもやと虹のごとき光彩を含んで湧きたつような空
気に巻きこまれたいという一念に追いつて立てられるからである。確信
もなければ方向もなく、負けるにきまつている戦争とわかつていな
がら平然として廟堂に位置を占めたり、指導的な立場におさまつた
りしていられるのは眼先きを去来する人気の雲が不安と恐怖を追
りあげてしまふからだ。

悪評の中に卓然としてそびえている文学者は、悪評の外にある人
氣に心を託すことによって存在を保つことができるとも言えよう。
ストリンドベルヒの人氣論の原理は、むしろ此処にあつたように思
われる。これを突きぬけてゆこうとすれば衆評の外に不拔の形を整
えねばならぬ。寸法のきまつた人間だけがぞろぞろとかびあがつ
てくるのは一種の時代現象でもある。彼等は常に時代の人氣に合
致したような寸法書をひけらがして出てくる。拙作「夜あけの門」
の中で、空虚になつた動物園に、ライオンや虎の檻をうづめるため
に豚や猫が入つてゐるということを書いた一節があるが、見てきた
男のはなしによると豚もライオンの檻の中ではまったく見ちがえる

ように立派になつてゐるという。これはライオンの檻の示す幻覺で
あつて、豚が立派に見えれば見ゆるほど人氣の湧きたつのは当然で
あるが、さればといつてライオンとゆう仮説の中に実在を示してい
る豚は、決して特異な環境によつて存在を証立してゐるわけでは
なく、「ライオンの檻の中にいる豚」という一般的な認識の上に存
在しているのである。動物園の場合とはかくとして、実人生におい
ては、もし、ほんとうのライオンがあらわれたとしても、おそらく
ランオンの吼え声をまねてゐる豚や、虎のような唸りかたをしてい
る猫ほどの人氣の對象にはなり得ないであろう。結局、敗戦という
現実のつくりあげた壁を前にして、誰がやつても同じことしか出来
ぬという前提によつて安心立命するところにも今日の時代的特質が
あるとすれば、あらゆる豚がその可能性にたよることによつて一種
の大臣病患者となるとところに希望があり情熱があり、そこに民主化
の原理がうちたてられるということにもなる。この場合、忘れては
ならぬことは民衆はどのような田舎芝居でも舞台の上でどつてい
る扮装人物には一応の拍手は送るけれども、しかし扮装をぬぎすて
た楽屋の俳優にはいきさかの敬意も表してはいないということであ
る。しかし、動物園の檻の中から出てきた豚が、あたらしい食慾の
對象となり、トンカツやライスカレーとして人氣をよびおこすこと
はおのずから別の問題である。

（『流』第一巻第一号、昭和二四年六月発行 発行所早稲田大
学十四人会）

未発表の資料と写真／日記書簡入詳細年譜
口絵入

啄木と洪民

定価七〇〇円
送料一〇〇円

遊座昭吾著 小田切秀雄・岩城之徳推薦
四六判 二九六頁
全国啄木ファン・研究家必読・愛蔵の書。

北原金司著 四六判 三二八頁 口絵八頁
第三版発売中ノ

マリア怜子を偲びて

——その愛は永遠に

定価六九〇円
送料一〇〇円

屋久島総合ガイドブック B6判 二〇四頁
屋久島の自然 松田好行 定価六〇〇円
送料二〇〇円
——屋久杉原生林へのいざない——

八重岳書房

東京都新宿区津久戸町14
電話東京(二六八)三五六七
振替東京一九二八一番